

[2019年度 優秀賞]

日本における時計台の変遷 —なぜ時計台は大学にあるのか—

阿達 麗子

目次

第1章	はじめに
(1)	研究の背景と目的
(2)	既存研究の整理
第2章	時計台の定義と草創期
(1)	時計台とは
(2)	明治の時計台
(i)	明治東京の時計台
(ii)	明治時計台その後の展開と考察
第3章	大学の時計台の設置経過
(1)	学舎の時計台設置時期とその分類
第4章	大学時計台のタイプ変遷と考察
(1)	第一時計台建設ブーム考察
(2)	第二次時計台建設ブーム考察
(i)	京大の時計台と東大の時計台
(ii)	時計台の由来考察
(3)	なぜ大学の時計台は今日まで継承されているのか
第5章	おわりに

第1章 はじめに

(1) 研究の背景と目的

ロンドンの「ビッグ・ベン」、リバプールの「ロイヤル・リバービル」、ブレーメンの「聖ペトリエ大聖堂」、ミラノの「スフォルツァ城・フィラレーテ門」、ウィーンの「ラートハウス（市庁舎）」などヨーロッパのガイドブック¹を開くと観光地だけでもその都市のランドマークとなるような時計台が数多くある。横山編（1986）も「ヨーロッパのまちを歩いていると、あちこちに時計塔がある。その造りも造られた時代も様々だが—（以下略）」と記しており、「ビッグ・ベン」のようにそのもの自体が観光資源になっている時計台もあれば、市庁舎や教会などに取り付けられていて街を歩いている中でふいに姿を現す時計台もあるようだ。その遠くからでも目につくデザインや多様な装飾など意匠が凝らされている時計台は都市の景観に一つの彩りを添えているといえるだろう。

一方で日本の都市景観を考えた際に「時計台」と呼べるものは少ない。日本の都市でランドマークと呼べる時計台を尋ねられた時、すぐに思い浮かぶのは銀座の「和光の時計台」だろうか。しかし、平野（1958）によると明治時代には日本においても都市で多くの時計台が確認されていたという。それらの時計台は時代を経る中で姿を消していったとされるが、現在も時計台がランドマークとして機能している施設がある。それは大学をはじめとした学舎である。日本では大学を中心にどの教育課程の学舎でも時計台を有する施設を確認できることが特徴的である。そこで本論では学舎の中でも最もそのシンボル性が強調されていると考えられる大学の時計台について取り上げたい。日本では、街の建造物から時計台が減少する中、大学の時計台はなぜ今日までその姿を留めることができたのか、また時計台には時代の変遷の中で形状などの変化はみられるのか。本論ではこのような問いのもと、日本の大学の時計台に関し、その変遷と今日まで残されてきた背景を明らかにすることを目的とする。

(2) 既存研究の整理

これまで日本において時計台の設置経過に焦点を当てた研究はあまりなされていない。横山編（1986）は雑誌「チャイム銀座」に1983年4月から85年1月に連載されていた「都市文化のなかの時計塔」を一冊にまとめ、日本だけでなく世界の時計塔にまつわる話を紹介し、大学の時計台のデザインについても個別に少しふれている。藤森（2008, 2010）は東京大学の安田講堂や京都大学の百周年時計台記念館について述べているが、その建築様式についてが主である。平本（2010）は「和光」の創業者である服部金太郎に関して述べる中で明治期の東京の時計台の設置状況について触れているが、その多くは平野（1958）を参考にしている。時計研究家である平野の研究に関しては第2章で紹介するが、平野は明治期東京に設置されていた時計台を網羅的に示しており、学舎の時計台も含めた明治期東京での時計台の設置経過は一定の整理がなされているため、参考になる部分が多い。しかし、大正・昭和期に設置された時計台やこの時期に多く設置されたと考えられる学舎の時計台に関して考察しているものはみられない。

第2章 時計台の定義と草創期

(1) 時計台とは

『日本語大辞典』によると時計台は「大時計を取り付けた塔」²とされており、説明は多くない。そこで参考までに『ウィキペディア (Wikipedia)』では「時計台あるいは時計塔とは、時計を周囲から見えやすいように上部に高く揚げられた建物や塔のことである。キリスト教圏において時計台は、よく教会や都市の公会堂、シティホールなど社会的な公共施設として設置されることが多かったが、独立した時計台として建てられたものも少なくない」³と記されている。高く目につきやすいところに時計が取り付けられている建造物を人々は時計台もしくは時計塔と認識していると考えられる。平野（1958）の整理は、時計台と聞いた時に一般に連想される「ビッグ・ベン」のような、建物の上部に塔状のものが突出している典型的なタイプのものだけでなく、慶應義塾大学図書館のように時計が取り付けられている建造物が上部にではなく前面に張り出しているものも含め、時計台（平野は「時計塔」と

している)としていることから、本論でもこのような形状のものも対象に含める。



図1 慶應義塾大学図書館^{※4}



図2 横浜繁栄本町通時計台神奈川県全図^{※5}

また、時計台と時計塔の用語の使い方に明確な区別はみられず、横山(1986)も「日本では時計塔という言葉はあまりなじみがなくて、時計台と呼ばれることの方が多い。これは塔が独立して建てられることが少なく、たいがい建物の頂上に載っていることが多かった日本での展開様相と関係があろう」と述べている。さらに浮世絵師歌川国鶴が明治初期に建設された「横浜町会所」の時計台を『横浜繁栄本町通時計台神奈川県全図』(1874)(図2)として描いていることから、時計台が日本で建設され始めた当初より「時計塔」ではなく「時計台」が一般に使用されていたものと思われる。したがって、本論では「時計台」の表現に統一する。

(2) 明治の時計台

日本で時計台が建設されるようになったのは開国し、西洋諸国との交流が盛んになった明治期以降のことである。明治の時計台に関しては平野(1958)が詳細に述べている。ここでは平野の研究を中心に明治の時計台について整理を行うとともに、その後の展開について考察を行いたい。

(i) 明治東京の時計台

平野(1958)によると東京だけで40の時計台が確認されている。ただし、これは平野が確認できたものだけであるため、実数はこれを上回ると記している。確認されている時計台の内訳は表1のとおりである。

表1 明治東京の時計台(平野(1958)による)

分類	事例数	施設名
時計店	14	小林時計店本店・小林時計店日本橋支店・京屋時計店・京屋時計店銀座支店・山内時計店・小林時計店京橋支店・小島時計店・吉沼時計店(1)・服部時計店・吉川時計店・鈴木時計店・吉沼時計店(2)・中山時計店・高木時計店

学 校	7	工部大学・陸軍士官学校・東京大学医学部・青山学院・東京大学工学部・第一高等師範学校・慶應義塾大学図書館
勸 工 場	4	梅園館勸工場・共栄館勸工場・博品館勸工場・南明館勸工場
妓 楼	4	角海老楼・八幡楼・甲子楼・新甲子楼
軍部関係	2	竹橋陣営(近衛歩兵隊営所)・参謀本部
博 覧 場	2	第一回内国勸業博覧会・第二回内国勸業博覧会
各種商店	2	湊家牛店・西浦陶器店
役 所	1	東京府庁
駅 舎	1	駅通寮
郵 便 局	1	江戸橋郵便局
新 聞 社	1	読売新聞社
邸 宅	1	関東閣(旧岩崎弥之助邸)

表1をみると、時計店に設置されていた時計台が14と圧倒的に多いが、他にも学校や勸工場、妓楼など様々な施設に設置されていたことがわかる。このことを平野は、時刻を知らせる時計本来の役割だけでなく、エキゾチックで目新しい存在であっただけに、特に商業施設などでは営業上最適な看板としての機能も果たしていたのだろうと分析している。

当時出版されていた『東京名所案内』⁶や『最新東京名所』⁷といった名所記や案内記類でも時計台は紹介されており、名所絵や錦絵、絵葉書などに数多く残されていることから人々の注目を集め、新名所として認識されていたことがうかがえる。図3の名所案内では時計店に設置された時計台が紹介され、図4の名所絵では虎ノ門工部大学校の時計台が描かれている。



図3 銀座^{*8}

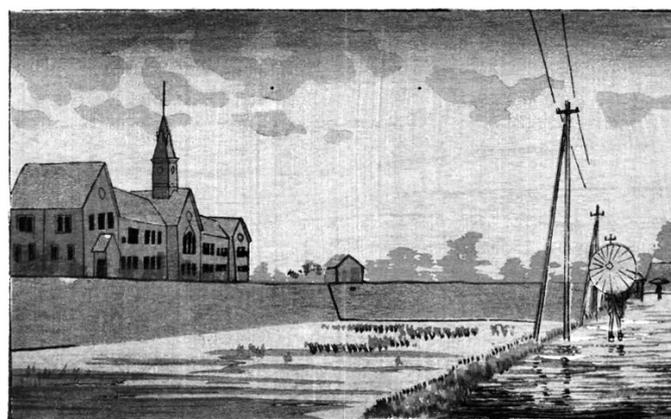


図4 虎ノ門工部大学校^{*9}

しかし、40以上もあったこれらの時計台は改築や火災その他の理由で取り壊され、明治から大正に時代が移り変わる頃にはすでにその数は半減、その後、東京に残存していた時計台の多くも1923年9月1日の関東大震災によって一挙に壊滅し、わずかに残存していた

いくつかの時計台も太平洋戦争の空襲で姿を消したという。平野が1958年当時に調査した段階で、東京で現存していた明治の時計台は関東閣(旧岩崎弥之助邸)のみとされている(平野 1958)。

(ii) 明治時計台のその後の展開と考察

平野は明治末から大正・昭和期にかけて時計台の建設が大幅に減少した要因として、①携帯時計や電気時計の普及と②建築様式の変遷の二点を挙げ、とくに後者による影響が大きかったと考察している。大正期になると大建築は従来までのゴシック式・ルネッサンス式の装飾が多い建物から、鉄筋コンクリートの箱のような近代建築へと移り変わっていった。これらの近代建築はその構造上、時計台のような装飾的な構造物を設置できる場所がほとんど見当たらず、時計台の激減につながったのではないかと指摘している。

明治期に繁華街をはじめとした街中でみられた時計台は大正期に移り変わる頃には大幅にその数を減らし、新たに建設されることはもちろん、一度取り壊されたものが再建されることもほとんどなくなっている。しかし、例えば東京大学では関東大震災をはさんで安田講堂の時計台を建設している。建築様式の変化や携帯時計の普及により設置意義を失ったとされる時計台が大学にとってはなんらかの意味があったのではないだろうか。第3章では大学の時計台について整理していきたい。

第3章 大学の時計台の設置経過

東京大学の「安田講堂」、京都大学の「百周年時計台記念館」、早稲田大学の「大隈記念講堂」、法政大学の「法政二高校舎」など古くから設置されている学校はシンボルとなる時計台を有している例が多い。では、いったいつ頃から日本の大学に時計台は建設されるようになったのだろうか。明治期から学制改革が繰り返され、どの範囲を「大学」として検討対象とするかは難しいが、本論では戦後の学制改革で新制大学が発足する1949年5月時点で大学とされた学校について、その前身校を含む484校を対象に時計台の有無を学校の『年史』類や記念写真集、HP等から調査した。資料の制約から時計台の有無を確認することが困難であった学校も多く、資料によって確認できた249校中、時計台の写真や記述を確認することができた学校は93校で、1949年時点までに設置されていた時計台は53事例であった。

(1) 学舎の時計台設置時期とその分類

確認できた53事例について表2に時計台設置時の学校名、設置年、時計台のタイプ等をまとめた。

表2 1949年までに設置された大学の時計台

時計台設置時の学校名	1949年5月時点の学校名	時計台の設置年	分類	備考 (時計台設置施設名等)	現存	参考資料注
工部大学	東京大学	1875年	A	工学寮工学校校舎		10
東京医学校	東京大学	1876年	A	本館		11,12,13
栃木師範学校	宇都宮大学	1877年	A	本館		14
山形縣師範学校	山形大学	1878年	A	本館		15,16,17
札幌農学校	北海道大学	1881年	A	演武場(現:札幌時計台)	○	18
同志社英学校	同志社大学	1884年	A	彰栄館	○	19
東京英和学校	青山学院大学	1886年	A	神学部校舎		20
旧第一高等学校	東京大学	1889年	A	本館		21
札幌農学校	北海道大学	1901年	A	農科大学講堂(1907~1918 東北帝国大学。以降、北海道帝国大学)		22,23
大阪府立高等医学校病院	大阪大学	1903年?	D	大阪府立高等医学校病院		24,25
米沢高等工業学校	山形大学	1910年	D	本館(現存するが時計は取り外されている)	△	26,27
大阪市立高等商業学校	大阪市立大学	1911年	B	烏ヶ辻校舎		28
九州帝国大学工科大学	九州大学	1911年	A	工科大学本館		29
慶應義塾	慶應義塾大学	1912年	D	図書館旧館	○	30,31,32
立教大学	立教大学	1919年	C	本館(現:モリス館)	○	33,34
中央大学	中央大学	1920年	C	図書館		35
日本大学	日本大学	1921年	D	三崎町校舎		36
旧制武蔵高等学校	武蔵大学	1922年	B	本校舎(現:江古田キャンパス3号館)	○	37
立正大学	立正大学	1923年?	C	立正大学本館		38
京都帝国大学	京都大学	1925年	B	京都帝国大学本館(現:百周年時計台記念館)	○	39,40,41
東京帝国大学	東京大学	1925年	B	大講堂(安田講堂)	○	42
青山学院	青山学院大学	1926年	D	中学部講堂(大学礼拝堂)		43
東北学院	東北学院大学	1926年	C	専門部校舎(現:東北学院大学本館)	○	44
早稲田大学	早稲田大学	1927年	B	大隈記念講堂	○	45
東京帝国大学	東京大学	1929年	B	航空研究所本館(現:駒場東大先端科学研究センター13号館)	○	46
東京府立化学工業学校	東京都立大学	1929年	C			47
上田天蚕専門学校	信州大学	1929年	D	繊維学部講堂	○	48
関西大学	関西大学	1929年	B	天六学舎		49,50

関西学院	関西学院大学	1929年	E	図書館	○	51,52
東京商科大学	一橋大学	1930年	B	国立本館図書館	○	53
兵庫県立神戸高等商業学校	神戸商科大学	1931年?	C	本館		54
広島文理科大学	広島大学	1931~ 1933年	C	文理学部一号館	○	55
神戸商業大学	神戸大学	1932年	C	六甲台本館	○	56
紅陵大学	拓殖大学	1932年	B	A館	○	57
府立高等学校	東京都立大学	1932年	B			58,59
浪華高等商業学校	大阪経済大学	1932年?	C			60
第一高等学校	東京大学	1933年	B	本館（現：駒場Iキャンパス1号館）	○	61,62
大阪商科大学	大阪市立大学	1934年	B	本館（現：1号館）	○	63
東京工業大学	東京工業大学	1934年	B	本館	○	64,65
神戸商業大学	神戸大学	1934年	C	兼松記念館	○	66,67
東京高等農林学校	東京農工大学	1935年	B	本館	○	68
北海道帝国大学	北海道大学	1935年	B	農学部本館	○	69,70
大阪城東商業学校	大阪城東大学	1935年	C	谷岡記念館	○	71,72,73
東京第一師範学校	東京学芸大学	1936年	B	男子部正門前校舎	○	74,75,76
法政大学予科	法政大学	1936年	B	予科校舎、のちに法政第二高校舎（現在は新築の時計台あり）		77
駒澤大学	駒澤大学	1937年	D	旧講堂		78,79
高田師範学校	新潟大学	1938年	C	本館	○	80
横浜専門学校	神奈川大学	1940年	D	本館		81
京都繊維専門学校	京都工芸繊維大学	不明	A	正門正面校舎		82
千葉医科大学	千葉大学	不明	D	千葉医科大学本館		83
山梨県女子師範学校	山梨大学	不明	D	不明		84
山梨工業専門学校	山梨大学	不明	D	講堂		85
共立女子職業学校	共立女子大学	不明	D	家政学部本館		86,87

時計台をその形状からいくつかのタイプに分類し、表中の分類に示した。それぞれの分類は以下の通りである。

【Aタイプ】 傾斜屋根の建造物の上に鐘楼状の構造物に取り付けられているタイプ。鐘楼状の構造物は左右対称の建造物の中心に設けられることが多い。明治初期の1870年代から1880年代にかけて設立された時計台のほとんどはこのAタイプに分類される。

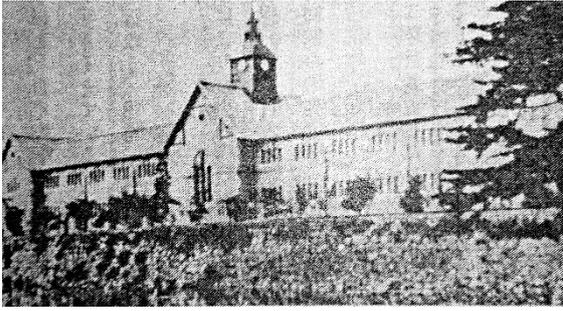


図5 工学寮工学校校舎^{※88}



図6 九州帝国大学工科大学本館^{※89}



図7 東京英和学校神学部校舎^{※90}

【Bタイプ】平面屋根の建造物に立方体状の塔がそびえたっているタイプ。その多くは建造物の中央に塔が位置し、塔の上部に時計が取り付けられているが、塔が建物の端に位置しているものや時計が塔の上部ではなく、中央に位置しているものも含めている。1911年に設立された大阪商科大学の烏ヶ辻校舎が最初の例である。



図8 東京大学安田講堂^{※91}



図9 早稲田大学大隈記念講堂^{※92}

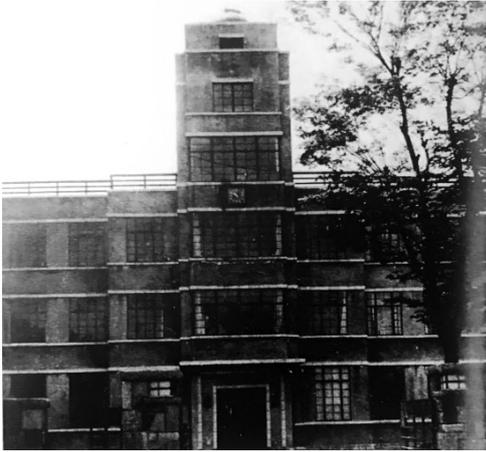


図10 府立高等学校校舎^{※93}

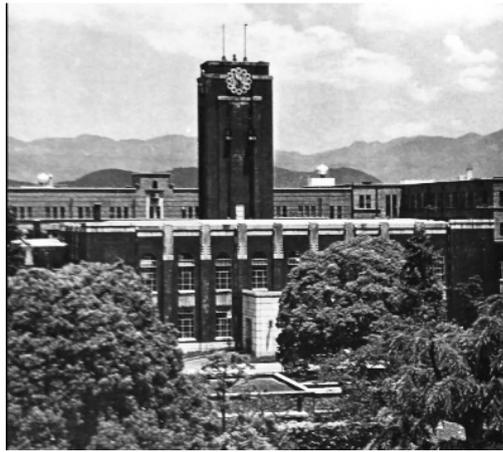


図11 京都大学本館^{※94}

【Cタイプ】平面屋根の建造物の一部が凸状に突出しているタイプ。凸状部分の多くは建物の中央に位置し、その上部に時計が取り付けられているが凸部が建物の端に位置するもの、時計が建物の上部に位置しないものも含めている。Bタイプとの違いは、凸部の高さの違いであり、塔状にみえるものをBとしている。1918年設立の立教大学のモリス館が最初の例。



図12 立教大学モリス館^{※95}

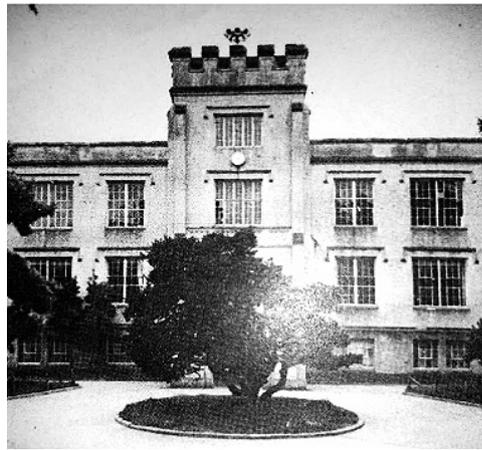


図13 東北学院大学本館^{※96}



図14 神戸大学兼松記念館^{※97}

【Dタイプ】 建造物の上部ではなく前面に張り出して時計を設置する構造物を付加しているタイプ。Dタイプの代表的なものとして1912年設立の慶應義塾大学図書館が挙げられる。



図15 日本大学三崎町校舎^{※98}



図16 神奈川大学本館^{※99}

【Eタイプ】 上記のタイプにあてはまらないもの。1929年に設置された関西学院大学図書館のみが挙げられる。



図17 関西学院大学図書館^{※100}

第4章 大学時計台のタイプ変遷と考察

その外観上の特徴から大きく5グループに分類したが、タイプごとの時計台の設置時期の傾向をみるため、設置年を図18に示した。

図18より、時計台の建設が集中している時期があることがわかる。まず、第一次時計台建設ブームは明治中期の1870年代から1880年代に到来し、その後、大正末から昭和初期の1920年代から1930年代にかけて第二次時計台建設のブームが再び訪れている。それぞれの時期について詳しく見ていきたい。

(1) 第一次時計台ブーム考察

明治政府は学校教育を国造りの根幹と考えていたため、学校建築には力が入れられ、その洋風化が推し進められたという(海野 2018)。また鈴木(2008)は、左右対称で、中央に塔を設置している形状は各地の学校や郡役所といった公的な建築に多く見られ、堂々とした印象を示すが、敷地に余裕がある立地条件から生み出されたものではないかと分析してい

る。図18では、当時、学校に建設された時計台のほとんどがAタイプに分類できるものであり、鈴木のように左右対称の堂々とした構造となっている。また、藤森（2017）は、それまでの和風建築とは全く異なる洋風建築を設計するにあたって地方の大工たちが上京し、すでに洋館が建設されている東京や居留地の見聞が頻繁に行われていたと述べている。長野県松本市にある明治擬洋風建築校舎の「開智学校」を設計した立石清重は、上京中に記した『東京出府記』に洋風建築のスケッチを残しているという。学校の時計台に関しても、全国的に類似したデザインが広まった要因として、このような背景もあるだろう。

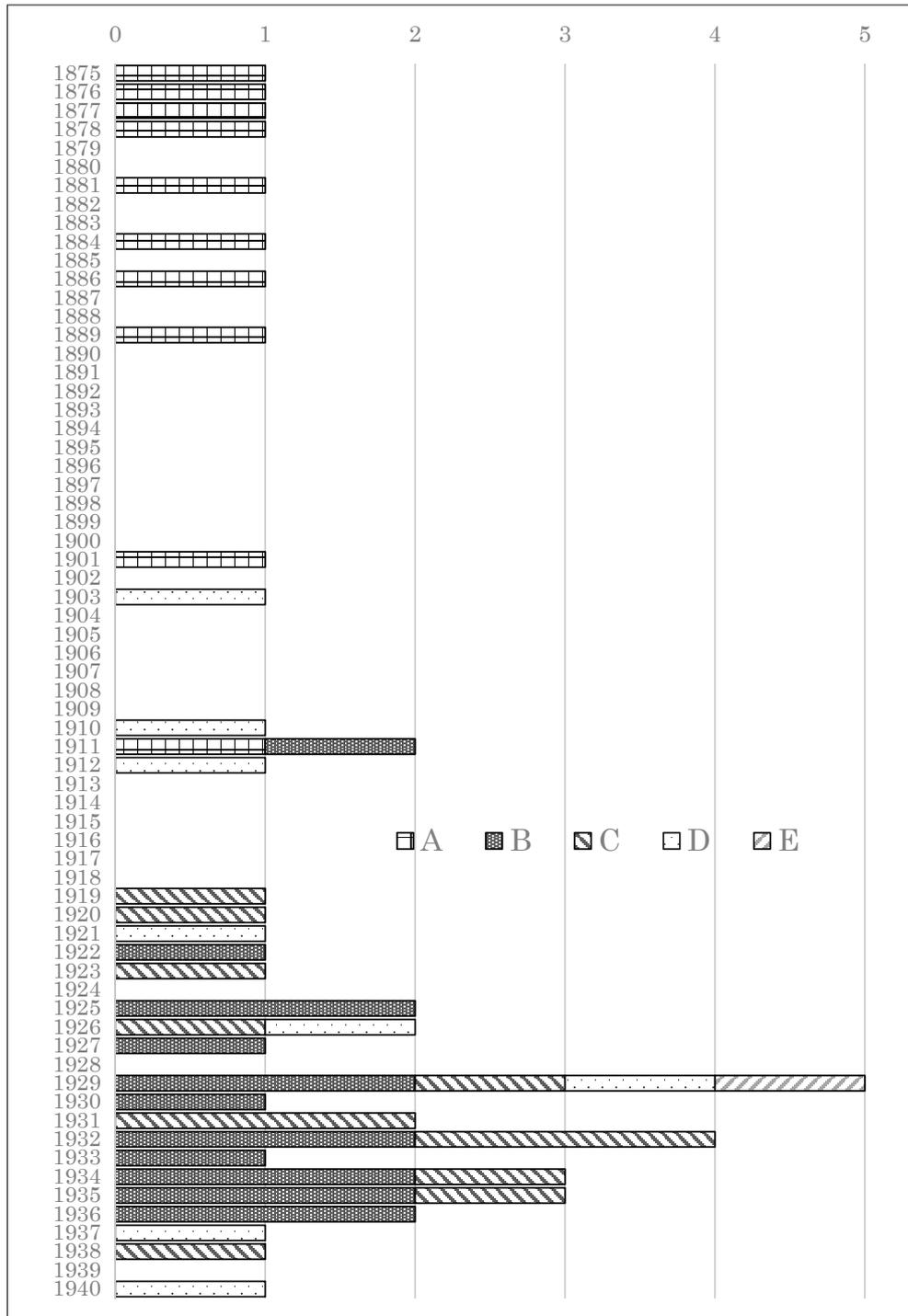


図18 時計台のタイプ別の設置件数の推移

また、平野(1958)の調査からもわかるように、明治期、時計台は、時計店を始め、勤工場や妓楼、警察署など幅広い施設で設置されており、その動きは「横浜高島町遊郭岩亀楼」(1873年頃)、「梅田停車場」(1874年)、「仙台警察署」(1882年)、「栃木県庁」(1884年)、「蕨内時計店(福島県)」(1888年)など、東京以外の都市でも数多く見られる。平野はこの動向を「舶来文化の進展にともなって咲いた、「文明開化」を象徴するささやかな花の一つ」と表現している。

しかし、このように全国で見受けられた明治の時計台もその姿は見られなくなる。その原因として建築様式の移り変わりが挙げられるのではないだろうか。海野(2018)によると、明治初期から全国各地に建設されていた洋館の大半は擬洋風建築と呼ばれるものであった。西洋建築を見たことがなく、西洋建築の指導者もない環境の中で日本の棟梁達によって「見よう見まね」で生み出されたものであり、西洋風の形を持ちながら、洋風、和風、中国風などの要素が混在したものであった。そのため、御雇外国人による建築や西洋的な建築教育の確立によってその役目を終え、1890年代以降徐々に衰退していったという。西洋建築が東京をはじめとした都市で建設されるようになり、擬洋風スタイルの時計台は時代遅れのものとなっていったのだろう。

このように1870年代から1880年代にかけて一時、一世を風靡したAタイプの時計台は、時計本来の役割である時間を示すことよりも文明開化を体現したシンボル性を示すものとしての役割が勝っていたことから、時代の流れとともに徐々にその存在意義が薄れていき、改修工事を行う際などに取り外され、姿を消していったのだろう。

(2) 第二次時計台建設ブーム考察

次に1920年代から1930年代にかけて到来した学校の第二次時計台建設ブームについてみていきたい。当時、急速に増加した時計台はタイプBとタイプCであり、今日まで変わらずその姿を留めているものも少なくなく、大学の時計台と聞いたらまずこの時期に建てられた建造物が頭に浮かぶ人も多いただろう。なぜこの時期に再び時計台建設が増加したのだろうか。その要因の一つとして、1925年の同時期に建設された京都大学「本館」と東京大学「大講堂」(通称：安田講堂)、この2つの時計台の存在が挙げられるのではないか。帝国大学令に基づき、最も早く東京帝国大学、続いて京都帝国大学として創立した2校は、他大学に対し一定の影響を持つとともに興味・関心も寄せられていたと考えられ、このことは2校で時計台が建設されて以降、大学の時計台数が増加傾向になるとともに、一橋大学「国立本館図書館」や東京工業大学「本館」など、特に国公立大学の学舎で同じスタイルが採用されたことからいえるだろう。この2校の時計台が建設された背景を知ることは第二次時計台建設ブームのきっかけを明らかにすることにつながると考える。

(i) 京大の時計台と東大の時計台

まずは京都大学と東京大学の時計台が建設された背景とその建築様式について簡単にまとめたい。京都大学百年史編纂委員会編(1998)によると、京都大学前身校の一つである第三高等中学校創設以来、20年以上堂々たる威容を誇っていた本館が1912年に焼失してしまい、1925年マンサード屋根¹⁰¹を戴いたレンガ造りの初代本館に代わって、時計台を備えた鉄筋コンクリート造りの現本館が竣工したと記述がある。デザインは、日本で明治末期か

ら大正期にかけて流行したセセッション様式がみられ、設計者の武田五一は好んでこの様式を用いたという。浅井(2008)は、武田がセセッションについて「其の製作材料の特性をよく活用する様に形を考案し色彩もなるべく淡泊にしてアール・ヌーボーの如く彫刻的なる心持を避けて、つとめて建設的力学的に材料を使ひこなし、…」と説明していることから、簡素性に意識を向けていたとする。武田は1905年頃からセセッション式とされる建物を設計しており、1925年の京都大学本館のデザインもやや時期は遅くなるが、全体として簡素な形状となっており、セセッション式の傾向がみられる。

次に安田講堂は横山編(1986)によると、講堂建設以前の東京大学には講堂と呼べる施設はなく、さらに天皇行幸に際する正式な便殿もないことを知った安田財閥の創業者・安田善次郎氏の寄付により建設されたという。安田講堂を始め、東京大学本郷キャンパスの建物は、独特の茶褐色のスクラッチ・タイルを用い、ネオ・ゴシック風の構成という内田祥三(東京帝国大学教授)が基本設計した「内田ゴシック」で統一されている。内田ゴシックは通常ゴシック様式とは少し異なり、過剰な装飾を用いるのではなく、端正な独特のスタイルにまとめられている。一方、内田の弟子である岸田日出刀等がヨーロッパで流行した表現主義風の意匠を好み、曲線や曲面を積極的に取り入れたため、安田講堂からはどちらのスタイルも見受けることができる。

京都大学本館、東京大学の安田講堂もどちらも大学の顔となる建造物を想定して、この時代の代表的な建築家によって設計されたものといえるだろう。

(ii) 時計台の由来考察

なぜこの2校が同時期にキャンパスの中心となる校舎に時計台を建設するに至ったのか。横山編(1986)は、東京大学の時計台の原型として、そのシンメトリー構造などからマンチェスターやウィーン、コペンハーゲンの市庁舎、内田がゴシック様式を好んで用いていたことから、オックスフォード大学やケンブリッジ大学からの影響を指摘している。確かに、当時の日本の建築物には武田はセセッション様式、内田はゴシック様式を好んで用いていた。西洋建築からの影響は否定できないだろう。しかし、オックスフォード大学には「トムタワー」があるが、キャンパスの中心にあるわけではない。キャンパスの中心となる建物への時計台設置は西洋の影響とはまた異なる別の要因が存在していたのではないだろうか。

この2校の時計台建設の経緯を知るため、「年史」や京都大学本館や安田講堂について取り上げている論文や文献調査をおこなったが、建築様式に関する記述は数多くみられるものの時計台を建設した背景に関する記述を見出せなかった。このことは当時の日本で大学の顔となる建物に時計台を設置することが特別なことではなかったからといえるかもしれない。前述したように明治期、文明開化のシンボルとして時計台は様々な施設に設置され、その中には多くの学校も含まれていた。この時、建設された校舎は左右対称で建物の中心に時計台を設置したシンメトリータイプのもので多く、また設置されている施設は本館であるといったように学校の顔となる場所であった。そのため、Aタイプの時計台は徐々に姿を消していったものの、学舎に時計台が設置されていることは人々の意識の中に定着し、大学の中心となる施設を建設する際にあらためて設置するか検討するまでもなく自然な流れで時計台が取り付けられたのではないだろうか。

前述したが、第二次ブームでの時計台の増加には、その後Bタイプが増えたことから

京都大学、東京大学の時計台が影響を及ぼしたと考えられる。もし、この時2校で大学の中心となる施設に時計台が設置されなければ、ブームも巻き起こらず、今日につながる大学の時計台はなかったかもしれない。

(3) なぜ大学の時計台は今日まで継承されているのか

これまで記したように大学の時計台建設には二度のブームがあったが、第一次ブームの際に設置された時計台のうち、その後建てなおされることもなく消滅したものもあった。一方、第二次ブームの際に建設された時計台は現存しているものが多い。もちろん、第一次ブームの時期に建てられたものは、建設用資材が第二次のものとは異なり、震災などで持ちこたえることができなかつたためだともいえる。しかし、原因はそれだけでないように思われる。1936年に建設された法政大学予科の時計台がそのいい例だろう。法政大学HP¹⁰²によると、時計台は予科の本館として建てられ、戦争による空襲の影響を免れて以後80年近く校舎として使用され続けていた。ただ、学校（大学予科の校地は1939年の旧制法政第二中学校、1943年の法政大学第二工業高等学校を経て、1948年法政第二高等学校に移管された）のシンボルといわれていたこの時計台も老朽化等に伴い、2014年6月には取り壊された。しかし、その際に取り壊される時計台の意匠を受け継いだ同じく白亜の新たな時計台が建設されている。取り壊すのではなく、また全く新しいデザインの時計台を作るのではなく、前回の時計台のデザインを踏襲した新たな時計台を建設している。これはこの時計台が学校のシンボルとして人々に広く認知されていたからに他ならないだろう。東京大学や京都大学を始め、現存している他の時計台には法政大学時計台のように新たに建て直したという事例はみられないが、改修工事を行い、その姿を継承する努力は行われている。第一次ブームの時計台は文明開化のシンボルとして建設されたものの、大学のシンボルとしての認識は強くなかつたため、取り壊された後に再び建設されることは多くなかつたのだろう。一方、第二次ブームの際に建設された時計台の多くは、それ以降確実に大学のシンボルとして認識されたことで、取り壊されることなく今日まで変わらずその姿をとどめ続けることができたのではないだろうか。法政の事例にみるように、大学と時計台の結びつきは、むしろ近年になるにつれ強固なものになってきているといえる。

第5章 おわりに

本論文では日本の大学の時計台に関し主に文献を中心に調査を行った。時代の移り変わりの中で、流行りの建築様式や用いられる建設用資材は異なるものになり、時計台の構造や外観に大きな変化がみられたが、一番の転換は明治初頭、文明開化のシンボルとして人々に受け止められていた時計台が、現在では大学のシンボルとして広く認知されるようになったことではないだろうか。明治初期には文明開化を具現的に示すものであった学校に時計台が多く設置されていた。そのことがその後に時計台が大学のシンボルになっていく下地になっていたと考えられる。しかし、それだけで今日のような大学のシンボルとして時計台の認識が定着したとは言えず、それを決定づけたのは偶然にも1925年に竣工した京都大学と東京大学の2つの時計台であったと考えてよいだろう。その後、国公立、私立問わず時計台は建設され、中には立命館大学や神奈川大学のように新たな時計台を次々と建

設している大学もみられる。第一次ブーム、第二次ブームを経て、今日我が国では大学のシンボルとして時計台が存在することがごく普通であるという認識が定着していることが特異であるが、さかのぼってみれば明治初期の文明開化の動きとその後の偶然が作用した結果といえよう。

なお、奈良県立短期大学が開設された1953年時点で用いていた旧奈良商工高校の校舎にもDタイプの時計台が存在していた。

〈脚注〉

1. 『ナショナルジオグラフィック海外旅行ガイド イギリス編』日経ナショナルジオグラフィック社・『地球の歩き方』ダイヤモンド・ビッグ社参照
2. “とけいだい”. 『講談社 カラー版 日本語大辞典』監修：梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義
3. 「時計台. Wikipedia」. <https://ja.wikipedia.org/wiki/時計台> (最終閲覧日2020年1月4日)
4. 阿部一恵編(2009)『明治の洋館24選 関東の名建築を訪ねて』淡交社
5. 横浜市編(1985)『横浜市史稿.政治編3』臨川書店
6. 浅羽肅也編(1896)『東京名所案内』桜香武舎
7. 東京沿革調査会編(1900)『最新東京名所』高岡書店
8. [井上]深景[画](不明)『東京名所帖』出版社不明
9. 井上安治・小林清親(1877)『東京名所. [8]』福田熊二良
10. 「工部大学校-Wikipedia」. 最終更新日2019年12月8日. <https://ja.wikipedia.org/wiki/工部大学校> (最終閲覧日2019年12月30日)
11. 中村哲夫(1997)『明治の学舎』、『サライ』編集部.
12. 平野(1958)
13. 「東京医学校本館」「第一高等学校」「東京帝国大学工科」の時計臺 一無縁坂・根津に響く鐘の音. 改訂版・江戸東京医史学散歩. <https://www.ishigaku-sampo.com/2017/06/07/> 「東京医学校本館」と「第一高等学校」の時計臺 / (最終閲覧日2019年12月30日)
14. 平野光雄(1976)『時計亦楽』青蛙房
15. 山形県立博物館「教育資料館-山形県立博物館」
www.yamagata-museum.jp/education-museum/ (最終閲覧日2019年12月30日)
16. 産業政策課「旧山形師範学校—山形県ホームページ」
https://www.pref.yamagata.jp/ou/shokokanko/110001/him/him_25.html
(最終閲覧日2019年12月30日)
17. 中村哲夫(1997)『明治の学舎』、『サライ』編集部.
18. 札幌市時計台指定管理者「札幌市時計台：時計台のあゆみ」
<http://sapporoshi-tokeidai.jp/know/walking.php> (最終閲覧日2019年12月29日)
19. 「建物紹介」. 同志社大学.
<https://www.doshisha.ac.jp/information/facility/buildings/imadegawa.html>
(最終閲覧日2020年1月28日)
20. 「建物の歴史」青山学院.
<https://www.aoyamagakuin.jp/history/building/> (最終閲覧日2020年1月2日)

21. 「第一高等学校時計塔(本郷区向ヶ丘) — 明治の時計塔(東京)」。TIMEKEEPER.
kodokei.com/ot_014_o.html (最終閲覧日 2019年12月30日)
22. 「東北帝国大学農科大学農学講堂時計塔(札幌) 明治の時計塔」。TIMEKEEPER.
www.kodokei.com/ot_029_3.html (最終閲覧日 2019年12月29日)
23. 「沿革」東北大学 <https://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/about/02/about0203/>
(最終閲覧日 2019年12月29日)
24. 大阪大学創立70周年記念出版実行委員会(2001年)『大阪大学創立70周年記念写真集
— The 70th anniversary of Osaka University』大阪大学.
25. 大阪大学五十年史編集実行委員会写真集小委員会(1981年)『大阪大学の五十年:写真集』
大阪大学.
26. 作道好男・江藤武人編(1974)『山形大学工学部六十五年史』財界評論新社
27. 山形大学工学部50年史編纂委員会編(1960)『山形大学工学部50年史』山形大学工学部
創立50周年記念会
28. 大阪商科大学六十年誌編纂委員会(1944)『大阪商科大学六十年史』大阪商科大学六十年
史編纂委員会.
29. 九州大学大学文書館(2011)『九州大学創立100年記念出版 九州大学百年史写真集』
九州大学百周年記念事業委員会
30. 「慶應義塾大学図書館—明治の時計塔(東京)」。TIMEKEEPER.
http://www.kodokei.com/ot_014_h.html (最終閲覧日 2020年1月2日)
31. 「慶應義塾のシンボル・図書館旧館」。慶應義塾
<https://www.keio.ac.jp/ja/keio-times/features/2019/12/> (最終閲覧日 2020年1月2日)
32. 「歴史の浪漫街道/孤高の時計塔学び舎・大学」。文明開化の歴史的遺産。
<http://rekishi-roman.jp/page-7-2.html> (最終閲覧日 2020年1月2日)
33. 奥村芳太郎(1971)『立教大学(大学シリーズ;R)』毎日新聞社
34. 「歴史の浪漫街道/孤高の時計塔学び舎・大学」。文明開化の歴史的遺産。
<http://rekishi-roman.jp/page-7-2.html> (最終閲覧日 2020年1月1日)
35. 中央大学七十年史編纂所(1955年)『中央大学七十年史』中央大学.
36. 作道好男・江藤武人(1977)『日本大学創基八十五年』財界評論新社
37. 学園創立60年史編纂委員会(1982)『武蔵大学六十年のあゆみ』根津育英会.
38. 「立正大学—Wikipedia」。最終更新日 2019年12月22日。
<https://ja.wikipedia.org/wiki/立正大学> (最終閲覧日 2020年1月1日)
39. 「塔時計—京都大学」。
www.kyoto-u.ac.jp/ja/clocktower/about/tou.html (最終閲覧日 2020年1月1日)
40. 京都大学百年史編集委員会(1997)
41. 京都大学百年史編集委員会(1998)
42. 本部計画課。「国の登録有形文化財 登録 | 東京大学」。
https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/campus-guide/b07_04_b.html
(最終閲覧日 2019年12月30日)
43. 「建物の歴史」青山学院。
<https://www.aoyamagakuin.jp/history/building/> (最終閲覧日 2020年1月2日)

44. 「本学のあゆみ」東北学院大学
<https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/about/history/1925.html>（最終閲覧日2020年1月29日）
45. 「大隈講堂の正面はなぜ少しずれているの？ 早稲田建築散歩」早稲田大学.
<https://www.waseda.jp/inst/weekly/feature/2017/10/09/34727/>（最終閲覧日2020年1月28日）
46. 本部計画課. 「国の登録有形文化財 登録 | 東京大学」.
https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/campus-guide/b07_04_b.html
 （最終閲覧日2019年12月30日）
47. 「東京都立大学 | 復興建築の世界」.
<https://tanken.com/tatemono/code-114/index.html> （最終閲覧日2019年12月30日）
48. 「信州大学繊維学部講堂 | 上田市文化財マップ」.
<https://museum.unic.jp/map/document/dot26.html> （最終閲覧日2020年1月1日）
49. 関西大学創立七十年史編集委員会(1956年)『関西大学七十年史』関西大学.
50. 関西大学理事 喜多村桂一郎(1936年)『関西大学五十年史』関西大学.
51. 関西学院大学(1961)『関西学院大学要覧』関西学院大学.
52. 「関西学院大学図書館」
<https://library.kwansei.ac.jp/about/history#history02> （最終閲覧日2020年1月1日）
53. 「歴史の浪漫街道 / 孤高の時計塔学び舎・大学」. 文明開化の歴史的遺産.
<http://rekishi-roman.jp/page-7-2.html> （最終閲覧日2019年12月30日）
54. 「兵庫県立大学の沿革」. 公立大学法人兵庫県立大学.
<https://www.u-hyogo.ac.jp/outline/about/history/index.html>（最終閲覧日2020年1月28日）
55. 広島文理科大学(1982)『創立四十年史—広島文理科大学・広島高等師範学校(日本教育史文献集成)』広島高等師範学校.
56. 神戸大学百年史編集委員会(2002年)『神戸大学百年史』神戸大学.
57. takudaiOfficial 「拓殖大学—文教キャンパス紹介」. 最終更新日2016年1月15日
https://www.youtube.com/watch?v=xqBuYDaZ1_c （最終閲覧日2020年1月29日）
58. 「府立高等学校」華麗なる旧制高校巡礼.
<http://qsay55.starfree.jp/FR.html> （最終閲覧日2020年1月29日）
59. 府立高等学校五十周年記念誌編纂委員会編(1979)『府立高等学校 五十周年記念誌』
 府立高等学校同窓会
60. 「沿革 | 学校法人 浪商学園」
<https://www.namishogakuen.jp/100th/history/> （最終閲覧日2020年1月2日）
61. 「歴史の浪漫街道 / 孤高の時計塔学び舎・大学」. 文明開化の歴史的遺産.
<http://rekishi-roman.jp/page-7-2.html> （最終閲覧日2019年12月30日）
62. 「国の登録有形文化財登録」. 東京大学.
https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/campus-guide/b07_04_b.html
 （最終閲覧日2020年1月28日）
63. 作道好男・江藤武人(1972年)『名城を仰ぎ見て：大阪市立大学商・経・法学部九十年史』
 財界評論新社
64. 東京工業大学(2011)『東京工業大学130年史』東京工業大学.
http://www.cent.titech.ac.jp/DL/DL_Collections/130th%20Anniversary.pdf

(最終閲覧日 2020年1月28日)

65. 東京工業大学(1940)『東京工業大学六十年史』東京工業大学.
66. 神戸大学百年史編集委員会(2002)『神戸大学百年史』神戸大学.
67. 作道好男・江藤武人(1976)『神戸大学凌霜七十年史』財界評論新社.
68. 東京農工大学創立記念事業会記念出版専門委員会(1981)『東京農工大学100年の歩み』東京農工大学創立記念事業会
69. 「華麗なる旧制高校巡礼—旧制北海道帝国大学予科」
qsay55.starfree.jp/HD.html (最終閲覧日 2019年12月30日)
70. 公益社団法人 ロングライフビル推進協会 (BELCA) 情報管理部「BELCA 賞 北海道大学 農学部本館」<http://www.belca.or.jp/l87.htm> (最終閲覧日 2019年12月30日)
71. 「谷岡記念館(大阪商業大学商業史博物館)」東大阪市.
<https://www.city.higashiosaka.lg.jp/0000014440.html> (最終閲覧日 2020年1月2日)
72. 「学校邦人谷岡学園」学園施設・関連会社.
<https://www.youtube.com/?gl=jp&hl=ja> (最終閲覧日 2020年1月2日)
73. 「谷岡記念館 文化遺産オンライン」
<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/186570> (最終閲覧日 2020年1月2日)
74. 「東京第一師範学校—Wikipedia」. 最終更新日 2019年7月31日.
<https://ja.wikipedia.org/wiki/東京第一師範学校> (最終閲覧日 2019年12月31日)
75. 東京学芸大学(1970)『東京学芸大学二十年史:創基九十六年史』東京学芸大学創立二十周年記念会
76. 東京学芸大学創立五十周年記念誌編集委員会『東京学芸大学五十年史 通史編』東京学芸大学五十周年記念事業後援会
77. 法政大学百年史編纂委員会(1980)『法政大学の100年』法政大学.
78. 駒澤大学開校百二十年史編纂委員会(2002)『駒澤大学開校百二十年 過去から今そして未来へ』駒澤大学.
79. 駒沢大学(1983)『駒沢大学百年史 上巻』駒沢大学年史編纂委員会
80. 新潟大学25年史編集委員会(1974)『新潟大学二十五年史 総篇』新潟大学25年史刊行委員会.
81. 大学史編纂・記念誌編集実行委員会(1998)『神奈川大学70年のあゆみ』神奈川大学.
82. 京都工芸繊維大学開学100周年・大学創立50周年事業マスタープラン委員会記念誌刊行専門部会(2001)『京都工芸繊維大学百年史』京都工芸繊維大学百周年事業委員会.
83. 千葉大学編(1965)『千葉大学 Chiba University』千葉大学
84. 丸田銓二郎(1964)『山梨大学学芸学部沿革史』山梨大学学芸学部
85. 作道好男・江藤武人(1975)『山梨大学工学部五十年史』財界評論新社教育調査会校史編纂室
86. 共立女子大学(1962)『共立女子大学要覧』共立女子大学.
87. 「学園の組織と沿革」共立女子学園.
<https://www.kyoritsu-wu.ac.jp/univ/history/> (最終閲覧日 2020年1月2日)
88. 平野(1958)
89. 九州大学大学文書館編(2011)『九州大学百年史写真集』九州大学百年史記念事業委員会

90. 平野(1958)
91. 小林一郎(2014)『ここだけは見ておきたい 東京の近代建築Ⅱ 23区東部・下町』吉川弘文館
92. 三船(2007)
93. 府立高等学校五十周年記念誌編纂委員会編(1979)『府立高等学校 五十周年記念誌』府立高等学校同窓会
94. 京都大学七十年史編集委員会編(1967)『京都大学七十年史』京都大学創立七十周年記念事業後援会
95. 三船(2007)
96. 東北学院大学編(1974)『東北学院大学』東北学院大学
97. 神戸大学百年史編纂委員会編(2002)『写真集』神戸大学
98. 日本大学(1985)『日に日に新たに』日本大学
99. 神奈川大学創立五十周年小史編纂委員会編(1982)『神奈川大学五十周年小史』神奈川大学
100. 関西学院大学編(1961)『関西学院大学要覧』関西学院大学
101. 宮本和義, アトリエM5(2007)『近代建築散歩 京都・大阪・神戸編』小学館、によるとマンサード屋根は、屋根の勾配が途中で切り替わるもので、最上階に屋根裏部屋を造る際、部屋の容量を確保するのに有効な手法であると記されている。
102. 「Vol.89 時計塔校舎が見守ってきた木月校地」, 法政大学法政大学について。
http://www.hosei.ac.jp/gaiyo/daigaku_shi/museum/2016/160607.html
 (最終閲覧日 2020年1月27日)

〈参考文献〉

- 浅井麻帆(2008)「「セセッション」から「分離派」へ：日本のWiener Secession受容史における訳語の変遷について」, 『京都大学大学院独文研究室研究報告22』 pp.59-90
- 海野聡(2018)『建物が語る日本の歴史』吉川弘文館
- 京都大学百年史編纂委員会編(1997)『京都大学百年史一写真集』京都大学後援会
- 京都大学百年史編纂委員会編(1998)『京都大学百年史一総説編』京都大学後援会
- 清水芳郎・一坪泰博(2007)『近代建築散歩 京都・大阪・神戸編』小学館
- 鈴木博之編(2008)『近代建築史』市ヶ谷出版社
- 総合大学問題研究所編(1980)『日本大学大鑑』日本学術通信社
- 平野光雄(1958)『明治・東京時計塔記』青蛙房
- 平本厚(2010)『シリーズ情熱の日本経営史7 世界を驚かせた技術と経営』, 芙蓉書房出版
- 藤森照信(2008)「七大学の建築1 東大・駒場・旧制一高の時計台」, 『学士会会報』 No.872, pp.101-102、藤森照信(2010)「七大学の建築11 京都大学・時計台」, 『学士会会報』 No.882, pp.105-108.
- 藤森照信(2017)『近代日本の洋風建築 開化篇』筑摩書房
- 三船康道(2007)『出会いたい東京の名建築一歴史ある建物編』新人物往来社
- 横浜市建築局学校建設課／横浜市教育委員会施設課編(1985)『昭和を生きぬいた学舎 横浜震災復興小学校の記録』
- 横山正編(1986)『時計塔一都市の時を刻む一』鹿児島出版会